

第10回 和歌山県弥生・古墳時代研究会の報告

開催日時：平成25年2月9日（土）13:30～16:00

開催場所：和歌山県立紀伊風土記の丘（和歌山市岩橋1411番地）

研究会の発表内容：

「大日山35号墳出土の家形埴輪の検討」仲原知之（紀伊風土記の丘）

現在大日山35号墳の埴輪の整理作業を進行中で、今年度末に報告書を刊行予定です。前回までに人物埴輪、動物埴輪を検討し、今回は家形埴輪、その次は器財埴輪を検討したいと思います。

大日山35号墳の家形埴輪は、東造出から3分割焼成の高床式の入母屋造をはじめ、5棟以上の家形埴輪が出土し、西造出からは3棟以上の家形埴輪が出土しています。ただし、西造出の1棟のみ原位置の可能性はあるだけで、他はすべて原位置に据わっていた状況ではありませんでした。今回ある程度個体が特定できれば報告書までにはそれぞれの出土状況を示したいと思います。

はじめに大日山35号墳の家形埴輪の概要を発表し、次にそれぞれ観察していただいて、最後に観察した結果について、意見交換していきました。

*今回、質疑応答では、参加者の質問に対して、青柳氏がコメントすることがほとんどだったので、今回の報告については青柳氏の発言としてまとめさせていただきます。

参加者：（敬称略）＜発表者1名＋11名 計12名＞

＜発表者＞仲原知之（紀伊風土記の丘）

＜参加者＞青柳泰介（橿原考古学研究所）、河内一浩（羽曳野市教委）、
関 真一（大阪府教育委員会）、丹野 拓（和歌山県文化財センター）、
花熊祐基（龍谷大学）、
（以下風土記の丘ボランティア）井ノ口清史、金森昌子、木村 健、
芝 貴子、津田明子、鳥居千純

【参加者のコメント・質疑応答】

<東造出の家形埴輪>

◎家 1

仲原 : 3分割焼成の高床式の入母屋造です。3分割焼成は今城塚古墳に類例がありますが、規模はこちらの方が一回り小さいです。一番上の切妻部には堅魚木や棟持柱、鰭状の棟飾りがあります。堅魚木は大きく、両端が少し反りあがる形で4箇所取り付けられています。乾燥していない段階で押さえて取り付けたと見えます。棟木は接合しませんでした。取り付く可能性がある中空の棟木が出土しています。破風上端が欠損するため復元していないが、おそらく千木があったと考えています。中間の寄棟と身舎部分は、出入口が8箇所設けられ、出入口部の下端の中央が少し半円状にくぼんでいます。1箇所だけ中央が盛り上がる形状になっています。外面に柱を表現したと思われる方形の板状のものを貼り付けています。そこには盾などの文様が刻まれています。妻側の屋根に棟持柱を取り付けて、切妻部の棟持柱を乗せて組み合うようになっています。屋根と身舎は接合する箇所がなかったので、取り付けられません。下段の高床部には円柱が9本取り付けられています。円柱は残りがあまりよくなく、1本に小孔があり、この小孔を中間と考えると柱の高さを決めました。高床部外面にはN字状の文様が巡っています。円柱下の基壇部分には文様がありません。

青柳 : 建築用語では、高床部分の側面は腰まわり、円柱下の基壇部分は裾まわりと言っているようです。寄棟部上端の板状のものは障泥板と言っています。屋根の棟覆の方形に取り付けているものを押縁、押縁を止める突起状のものをこうがいと言っています。

寄棟の壁と屋根の内面の接合部分ですが、残っていませんが平坦面があって、それに屋根を乗せている形態だと思います。屋根の補強材の下端が少し平坦になっているので平坦面と接していた痕跡でしょう。壁を作った後その上端に面を作って、別作りの屋根を乗せて接合したような製作工程が考えられます。あと、出入口の1箇所だけ違う形状をしている部分ですが、中央をくぼませようとして少し失敗しただけだと思います。

◎家 2

仲原 : 分割焼成された切妻の屋根部分で、半分ほど残存しています。格子状に線刻され、小孔が多数あけられています。接合できなかつたが堅魚木がのせられていた部分が残っています。おそらく同一個体と考えられる堅魚木が2本出土しています。この堅魚木は家1に比べて小形で直線的で、少し変わったことに、堅魚木の両端に小孔がありますが、

それが堅魚木側面に貫通しています。反対側に貫通させようと思って失敗したのかもしれませんが、この小孔を貫通させる意味はわかりません。切妻屋根部と組み合わせる可能性のある胎土や焼成などが類似する寄棟部の屋根軒先部分や棟持柱、寄棟部上端に取り付く装飾された障泥板などが出土しています。

青柳 : 屋根頂部に剥離していない箇所があり、少し大きいですが、穴があいていたと考えられます。今城塚古墳でも確か頂部にすかしがあるものがあつたと思います。他にも長方形や楕円形のすかしがあるものがあつたと思います。屋根を作っていく際、最後にどこで閉じるかという問題があり、多くは妻側の壁で閉じるのですが、屋根の上で閉じるものもあります。そうした上で閉じるときにその部分をすかしとして残したと考えられます。屋根中央部の断面で、小孔状の痕跡がありますが、作っていく際に棒などで支えをした痕跡などが考えられます。作っていく時に支えをして上部が完成していくとはずして粘土で埋めたと考えることができるかもしれません。

◎家 3

仲原 : 平屋の身舎の壁部分で、接合する屋根はありませんでした。外周を突帯状に貼り付けた出入口部が2箇所設けられています。外面の平側中央に柱を表現した可能性がある突帯が貼り付けられています。裾廻突帯は逆L字状になっています。下端部には半円形状のえぐりがありますが、一部半円形ではなく円形のすかし状になっている箇所があります。少し胎土が違いますが、家2とした切妻部・寄棟部と組み合わせる可能性があります。

青柳 : 外面の突帯は柱表現だと思いますが、内側の突帯は柱を表現した可能性もありますが、作りが雑なのでどうかと思います。大日山35号墳では突帯状の補強材を多く使っており、しかも本当に補強の役割を果たしているのか疑問があるような箇所にも取り付けているので、柱表現ではなく、ただの補強材である可能性が高いと思います。柱以外の内部の表現がまったくないので、柱と断定しづらい状況です。

◎家 4

仲原 : 一番大きな個体は身舎部分と屋根の一部が残るもので、これ以上大きく接合しませんでした。同一個体と思われる破片の中に寄棟屋根の棟付近があり、身舎の上は寄棟の屋根が取り付けられていたと推測できます。この他、同一個体と考えられるものに、寄棟屋根の軒先部分や出入口部がある身舎の壁、屋根と壁の接合部分、身舎の裾と思われるものなどがあります。接合しませんでしたが、ある程度の形状は復元できる可能性があります。

青柳 : 棟付近と考えられていたものはそれでいいと思います。石見遺跡などのような棟の高い寄棟造の家になると思います。壁の横方向の突帯は裾廻りではないので、壁中央になるでしょう。この時期になるとデフォルメが進行して、この突帯以下が高床部分に相当する可能性もあり、平屋と高床が峻別できない場合もあります。

◎家5

仲原 : 破風部分の可能性のある個体で、家1～4に比べて小形になることや胎土なども違うことから家5としました。同じ胎土のもので同じく少し小形で中空の棟木が1つ出土しています。

青柳 : 少し疑問が残りますが、破風部分と考えていいと思います。破風板側面が少しえぐれていて鱗飾り状のなっていたかもしれません。

◎家6

仲原 : 小形で中実の棟木の可能性のあるものが1つ出土しています。他の家とも胎土が違うので、これが棟木であればもう1棟の家があったことになります。同じような胎土の棟覆の押縁・こうがい部分の破片が複数あります。この他には破片が確認できません。

青柳 : 破風側面に付くものである可能性もありますが、棟木でいいと思います。他の家にはない中実のもので、少し小形ですし、大形の家には中空の棟木、小形の家には中実の棟木であった可能性があります。

◎千木

仲原 : 東造出からは千木が3個体出土しており、大きさや文様などから同一の家のもと考えられます。一番残りがよい個体では2本が交差する箇所まで残っているが、交差部分に今城塚古墳のような段は認められません。どの家とも接合しませんでした。家1や2に取り付く可能性と別の家であった可能性があります。

青柳 : 以前来たときは家1に取り付いてもいいのではないかと思っていたのですが、家1や家2とも千木にあるような円形の文様が確認できませんので、なんともいえません。

◎その他の家の可能性のある破片

仲原 : 円柱部分の破片や壁や破風(千木)の可能性のある個体などがありますが、家の部材かはっきりしないものです。このうちどれかが家の部材だとするとさらに家の個体数が増えることになります。

青柳 : 家では考えられないような破片があり、器財埴輪でなにかないかなと思います。千木の可能性のあるものですが、千木でいい気もしますが、別の器財埴輪の可能性も考えていかなければいけないでしょう。円柱と思われる破片についても断定することは難しいですが、大日山35号墳であればもう少し多くの個体があってもいいと思いますので、可能

性を示していればいいのではないのでしょうか。

<西造出の家形埴輪>

◎家1

仲原 : 分割焼成された切妻部の屋根で、棟に鰭状の飾りを取り付けていて、堅魚木が乗らないタイプです。屋根には格子状の線刻と小孔が多数あります。破風上部は丸くなって、千木はつきません。中空の棟木が接合します。胎土から同一個体の可能性がある棟持柱と思われる破片がありますが、妻側の壁と棟木との距離がかなり大きく離れることが少し難点です。切妻部が乗るはずの寄棟部などの破片は確認できません。

青柳 : 棟木の形状から下に棟持柱が取り付くと考えられます。棟持柱の可能性がある個体ですが、下端部が東造出の家1の棟持柱に見られる接地面が確認できるので、棟持柱で問題ないと思います。少し壁とは離れますが、取り付いてもいいのではないかと思います。

◎家2

仲原 : 調査時に原位置を保っていた可能性があると考えられた家で、出入口部がある壁部分です。同じ胎土のものに寄棟の屋根軒先部分の破片があります。家1とは違う胎土です。

青柳 : 寄棟造と入母屋造の可能性があります。残りがよくないので断定できませんが、この時期であれば入母屋造の方が無難ではないでしょうか。

◎家3

仲原 : 屋根の軒先部分などがあり、家1や2とは違う胎土なので家3としました。同じ胎土のものに壁の可能性のあるものや円柱の可能性のあるもの、棟覆の押縁・こうがいの破片がありますが、ほとんど形状がわかるものはありません。

青柳 : 壁裾にも見える個体ですが、裾廻突帯だとすると下すぎるので、分割焼成の身舎の壁であればありえるかもしれませんが断定はできません。斜めのはがれた痕跡も文様を構成する突帯の可能性もあります。いずれにしても器財埴輪としても検討する必要があります。

◎その他の家の可能性がある破片

仲原 : 家の可能性がある破片は複数ありますが、家とは特定できません。

青柳 : 西造出は斜面が急なので多くの家が転落していると考えた方がいいと思いますので、もう少し数はあったと思います。小さい破片では家かどうか特定できませんので、次の器財埴輪の検討でも取り上げてもらえればと思います。

<全般に対するコメント>

青柳 : この時代の大日山 35 号墳クラスであれば家形埴輪が 10~15 棟くらいあってもいいと思います。6 世紀になると切妻はほとんどなくなるのですが、今城塚古墳のように大形のものは入母屋造、中形のものは寄棟造、小形のものは切妻造というように作りわけていたかもしれません。東造出と西造出の違いですが、東は堅魚木を乗せる、西は堅魚木ではなく簷飾りを乗せているというように、設置する場所によって家の種類を変えている可能性があります。松阪市の宝塚 1 号墳では造出とその 1 段下の部分にある家では確か同じように種類が違ったと思います。

<まとめ>

仲原 : 最後にみなさんの意見をふまえてまとめたいと思います。

東造出では、家 1 が 3 分割焼成の高床式入母屋造です。家 2 は分割焼成の屋根で、家 3 と組みあえば、2 分割焼成の平屋式入母屋造になります。家 4 は分割焼成でない平屋式寄棟造ですが、平屋と高床は峻別できない可能性もあります。家 5 は切妻造か入母屋造の屋根ですが、小形なので切妻造の可能性の方が高いと思います。家 6 は小形の切妻造か入母屋造で、これも小形なので切妻造かもしれません。千木は家 1 か家 2 の可能性もありますが、あるいは別個体かもしれません。

西造出では、家 1 は分割焼成の入母屋造です。家 2 は寄棟造か入母屋造の屋根ですが、この時期だと入母屋造の方が無難だと思います。家 3 は寄棟造か入母屋造で、高床式の可能性もあります。

以上、東造出では家 2 と 3 が組み合ったとしたら、5 棟以上が確認でき、西造出では 3 棟以上が確認できたこととなります。小さい部材につきましては、器財埴輪の検討を通じてもう一度確認していきたいと思います。